

# カナダ・オンタリオ州のレッジョ・インスピレーション

—全日制幼稚園の実施過程に着目して—

教職開発コース 浅井幸子  
日本大学 黒田友紀  
埼玉大学 北田佳子

Reggio Inspiration in Ontario, Canada

—Focusing on the Implementation of Full-day Kindergartens—

Sachiko ASAI, Yuki KURODA and Yoshiko KITADA

The Ontario Ministry of Education decided in 2010 to implement the Full-Day Kindergarten for all 4 and 5-year-old children. This study examines the Reggio Inspiration in early education in Ontario, in line with the policy formulation and implementation process of the Full-Day Kindergarten. We found the following. First, “Early Learning for Every Child Today (ELECT)”, which was a guideline for early education developed in 2007, had both the potential to create rich play-based practices for children and the risk of to make practices poor due to too many skills and indicators. Second, “With Our Best Future in Mind (Pascal Report)”, which developed in 2009 and designed the Full-Time Kindergarten, emphasized ELECT as lists of skills and indicators. Third, teacher resources were created to support play-based learning, with the idea of “rich child” introduced from the idea of Reggio Emilia. Fourth, the teacher resource “How Does Learning Happen (HDLH)” developed in 2014, attempted to resist the situation in which ELECT as lists of skills and indicators made practices poor through respecting the autonomy and professionalism of teacher team.

## 論文目次

- 1 問題の所在
- 2 科学的な乳幼児研究と『今日のすべての乳幼児のための学習 (ELECT)』
  - A 乳幼児教育推進のエビデンスとしての乳幼児期の脳神経科学と発達研究の知見
  - B ELECT策定の背景
  - C ELECTの特徴
- 3 全日制幼稚園における『今日のすべての乳幼児のための学習 (ELECT)』の機能
  - A パスカル報告における政策提言
  - B 全日制幼稚園の実施と「全日制幼稚園学習プログラム」
  - C 遊びに基づく保育の困難
- 4 レッジョのアイデアの導入過程
  - A オンタリオにおけるレッジョ・インスピレーションの展開
  - B 政策立案者との協働
- 5 『学習はどのように生起するか (HDLH)』の登場によるバダゴジーの転換

- A 『学習はどのように生起するか (HDLH)』の特徴
  - B ELECTからHDLHへの転換
  - C HDLHが提起する抵抗の物語
- 6 おわりに
  - 1 問題の所在

本研究の目的は、カナダのオンタリオ州におけるレッジョ・インスピレーションの展開を、全日制幼稚園の制度化の過程に即して検討することにある。イタリアのレッジョ・エミリア市の幼児教育は、国際的に注目を集め、レッジョに学ぶ保育者と研究者のグローバルなネットワークが形成されている。その文脈で用いられているのが、レッジョ・インスピレーションという言葉である。この言葉は、教育思想を異なる文脈に移動した時にどのように機能するかということは明確にはわからず、ローカルな伝統と文化との関係においてレッジョの理解を構築する必要があるという考えを示している (Dahlberg, Moss and Pence 2013, 浅井

2018)。すなわち、レッジョ・インスピレーションという概念は、レッジョからの学びを、それぞれの国や地域の文化的な文脈をふまえて分析する必要性を示している。

オンタリオ州のレッジョ・インスピレーションの特徴は、自治体レベルでの取り組みが行われた点にある。レッジョ・エミリア市の幼児教育は、自治体の全ての公立学校で行われており、その重要性は、レッジョ・エミリア・アプローチと呼ばれる教育のアイデアばかりでなく、自治体の幼児教育システムにある(Moss 2014)。しかしレッジョ・インスパイアの教育は、教師個人や個々の園で取り組まれることが多く、自治体を単位とする事例はそれほど多くない。オンタリオ州の取り組みは稀有な事例の一つとなっている(Callaghan and Avery 2015)。

オンタリオ州のレッジョ・インスピレーションのもう一つの特徴は、科学的な発達研究の技術的な支配に対する抵抗としての意味合いを持った点にある。オンタリオ州は、全日制幼稚園を政策化する過程で、『乳幼児期の研究 (Early Years Study)』を実施し、脳科学や発達科学の科学的な知見を活用した(犬塚 2017, 松井 2018)。その過程で作成されたガイドライン『今日のすべての乳幼児のための学習 (Early Learning for Every Child Today, 以下ELECT)』(2007)がチェックリストを生み出して実践を縛ってしまい、そのような状況に対する危惧から『学習はどのように生起するか (How Does Learning Happen, 以下HDLH)』(2014)などのレッジョ・インスパイアの教師用リソースが作成されている。ダールベリら (Dahlberg, Moss and Pence 2013) は、幼児教育を技術的な実践へと縮減する潮流に対する抵抗の拠点の一つはレッジョだと述べているが、オンタリオ州はそのことを示す事例の一つである。

オンタリオ州の幼児教育は、2010年に全日制幼稚園を導入し、カナダの幼児教育改革のモデルとなったことによって着目され、近年、その過程の検討が進んでいる。犬塚 (2017) は教育者チーム、とくに幼稚園教師と乳幼児教育士の連携に着目して制度化の過程を検討している。佐藤 (2017) は制度化の過程を、州が2008年に発表した貧困削減対策「連鎖を断つ」に着目して記述している。松井 (2018) は2010年以降のカナダの各州における全日制幼稚園の政策過程を比較し、オンタリオ州とブリティッシュコロンビア州を、政策決定に科学的知見を用い他の州の政策に影響を与えた州として特徴づけている。

以下、松井 (2018) の時期区分を参照しつつ、オンタリオ州の幼児教育政策の展開を概観しておこう。第一段階は1999年から2002年である。前ニューブランズウィック州副知事のマケイン (McCain, M) と脳神経科学者のマスタード (Mustard, F) によって、乳幼児期の発達に関する報告書『乳幼児期の研究』(1999年)が出される。それを受けて2001年に「乳幼児の計画 (Early Years Plan)」が発表され、乳幼児センターが設置された。第二段階は、マギンティが州知事となった2003年から2007年である。この間、2004年にベスト・スタート計画が開始され、2005年にトロント大学オンタリオ教育研究所 (OISE) のパートランドを座長とする乳幼児の学習のベスト・スタート専門委員会が設置された。委員会は2007年に、乳幼児施設のガイドラインとしてELECTを発表する。第三段階は、2007年に全日制幼稚園の実現を公約としたマギンティが再選されてから、2010年に全日制幼稚園が導入されるまでである。全日制幼稚園の実現にあたって、OISEの教授であるパスカルがアドバイザーとして任命され、2009年6月に全日制幼稚園を含む乳幼児政策の青写真を描く報告書『我々の最高の未来を考えて (With Our Best Future in Mind)』を提出した。

以上のように、全日制幼稚園の政策の展開が明らかされてきたが、それぞれの政策文書の内容や機能についてはあまり踏み込んだ検討が行なわれておらず、とくに全日制幼稚園がスタートして以降の政策文書は、ほぼ未検討である。そこで本研究は、ELECTがどのような特徴を有し、どのように機能したか、そこで生じた問題状況に対してどのようにレッジョ・インスパイアの文書が対応しているかを検討する。ELECTは全日制幼稚園の導入を可能にする一方で、乳幼児の教育の特定の物語、すなわち子どもを領域に分割して捉え、それぞれのスキルを身につけさせるという物語として機能した。それに対して異なる物語の提示を試みたのが、HDLHなどのレッジョ・インスパイアの文書である。それらの文書は、2009年から2015年まで幼児教育課の次官をつとめたジム・グリーブのチームによって作成された<sup>1</sup>。チームをサポートしたオンタリオレッジョ協会のキャラハンは、HDLHの意義を「チェックリストや「ハウツー」のマニュアルではなく、思考と会話を誘発するようにデザインされている」と述べている (Callaghan and Avery 2015)。

以下、2節でELECTが成立する過程とその特徴を明らかにし、3節で全日制幼稚園の実施にあたってELECTがどのように機能したかを検討する。4節で

は、乳幼児政策にレッジョ・インスピレーションが導入された経緯をたどり、5節でその中心的な文書であるHDLHを検討する。資料としてオンタリオ州の行政文書を用いるほか、オンタリオレッジョ協会代表のカリン・キャラハン (Karyn Callaghan) へのインタビュー (2019年2月27日実施) と私立ビショップ・ストラチャン・スクールのジュニア・スクール校長のキャスリーン・ハント (Catherine Hant) へのインタビュー (2019年2月26日実施) を補足的に用いる。

## 2. 科学的な乳幼児研究と『今日のすべての乳幼児のための学習 (ELECT)』

現在のオンタリオ州の幼児教育や全日制幼稚園の推進の論理的基盤となっているのは、1999年の『乳幼児期の研究』である<sup>2</sup>。本節では、まず、乳幼児教育推進のエビデンスとしての乳幼児期の脳神経科学と発達の研究の知見を確認し、ELECTの策定にあたって何が参照され、どのような乳幼児教育政策を進めようとしたのかを明らかにする。

### A 乳幼児教育推進のエビデンスとしての乳幼児期の脳神経科学と発達研究の知見

前述のマスタードとマケインによる『乳幼児期の研究』において、0～6歳までの乳幼児期の神経・脳科学と発達との関係が注目され、乳幼児期に教育を行うことの重要性が主張された。脳科学研究と子どもの発達研究に関する科学的知見を提示したこの研究は、オンタリオ州におけるその後の乳幼児教育研究や乳幼児教育政策に影響を与えた。

『乳幼児期の研究』の第1章「脳神経研究と乳幼児教育」では、以下のような科学的知見が示されていた。

- ・6歳までの脳の発達がその後の学習や行動や健康に最も重要な影響をもたらし、とくに0～3歳までの間に何十億もの脳神経の結びつきが起こる
- ・大人や他の子どもたちとの刺激や積極的な関わり合いが重要である
- ・乳幼児期の脳は親などによる感覚器への刺激を通して発達するため、積極的な刺激となる養育 (nurturing) が重要である
- ・脳の発達が途切れることのない連続体であると考えらるなら、乳幼児の発達や学習計画 (initiatives) も連続的なものとして捉えるべきであること
- ・早期の学習は、乳幼児期にケアをする人々との質の高い関わり合いと、遊びを基礎とした他の子どもたち

との問題解決の機会を基礎とすべきであること

・親やケアを行う人々に関わる幼児教育プログラムは、できるだけ早くプログラムを始めれば始めるほどよく、すべての社会経済的なグループからくる子どもたちや家族も恩恵を得ることができる。

その他の章では、社会経済的な変化と家族や子どもの状況について (第2章)、オンタリオ州の子どもたちの学力などの状況について (第3章)、教育の機会と投資のミスマッチについて (第4章)、州内の幼児教育プログラムの強化と経験 (第5章)、幼児期の発達と養育のフレームワークに向けてのヴィジョン (第6章) について述べられており、第7章では11項目の勧告が示されている。

この勧告では、乳幼児教育を政策の最優先課題として投資を行うことをはじめ、親とコミュニティによる乳幼児教育の諸関係機関の連携と拡大が強く打ち出されている。たとえば、民間セクターへの乳幼児教育の協力依頼、生涯教育の一部としての幼児期の理解の普及、乳幼児教育と学校の協働と接続、親による養育とコミュニティにおける乳幼児教育センターの在り方などの様々な施策が提案されている。そのなかで、とくに乳幼児教育の枠組みの策定等については、勧告2でタスクグループを組織して6歳までの子どもの発達と育児 (parenting) のプログラムの枠組みを作成すること、勧告10でコミュニティレベルでの就学前の子どもの「学習へのレディネス」の測定を導入することが提案されている。また、勧告6では、乳幼児教育に携わる保育者が新しい知識を知ることと、新しい知見に則った研修プログラムを開発することが提案されている。こうして、乳幼児教育の重要性と脳神経科学と子どもの発達研究の知見に則った、乳幼児教育の枠組みの開発と就学に向けたレディネスの測定、そしてコミュニティを基盤とする乳幼児教育センターの拡大が具体的な方策として進められていくことになった。

### B ELECT策定の背景

オンタリオ州政府は、『乳幼児期の研究』の勧告を実行に移すために「ベスト・スタート計画」に着手し、2005年に専門委員会を設置して『今日のすべての子どものための早期学習』(ELECT)の策定の準備を行った。ここではELECTを策定するにあたって、ベスト・スタート計画の専門委員会が何を検討し、何に注目したのかを確認しておきたい。

ELECTの早期教育の枠組みを作成するための準備段階で、次の3つの幼児教育の指針についての検討を

行っている (Ontario Ministry of Education 2007)。まず、2004年のOECDによる『5つの幼児教育カリキュラムの概要』(OECD 2004)である。この報告では、ベルギーの「経験に基づく教育」、アメリカの「ハイ・スコープ」、イタリアの「レッジョ・エミリア・アプローチ」、ニュージーランドの「テ・ファリキ」、スウェーデンの「スウェーデン・カリキュラム」の5つのカリキュラムの特徴が紹介・分析されている。そして、幼児教育のカリキュラム開発の課題が提示された。ELECTの策定の準備段階で、OECDが提示した課題のなかから、幼児教育の指針として16項目が抽出されている<sup>3</sup>。次に、国際幼児教育協会 (Association for Childhood Education International: ACEI) の「乳幼児教育のグローバルガイドライン (Global guidelines for early childhood)」から13項目の指針が抽出されている。特に、教育者やケアをする人の能力と育成について4項目挙げられている点の特徴であろう。もうひとつは、OECDのプログラム・マネージャーであったベネット (Bennett, J) の2004年の国家の政策決定におけるカリキュラムの問題の検討 (Curriculum issues in national policy-making, Keynote address) であった。ここからは、乳幼児教育センターに指針を与える原理や価値の表明、ペダゴジー上の指針であること、知識やスキルや態度などの内容と結果を示すこと、質の高さを評価して示すことの4項目が指針として抽出されている。このように、3つの文書において重視されていたグローバルな動向を確認したうえで、枠組みの策定が進められたことがわかる (*Ibid.*, 134-135)。

そして、乳幼児教育の枠組みの策定の準備として、オーストラリア (タスマニア)、ベルギー、カナダ (ケベック州)、フィンランド、イタリア (レッジョ・エミリア)、日本、ニュージーランド、シンガポール、スウェーデン、英国 (イングランド)、スコットランド、米国のハイ・スコープ・カリキュラム、米国の就学前教育のカリキュラム、米国イリノイ州の乳幼児学習のスタンダードの、計14の国内外のカリキュラムが検討された (Dickinson 2005)。そこでは、幼児教育の定義、政策、ビジョン、カリキュラムの枠組み、役割、幼児教育と学校の接続、計画と評価、そして、それらのカリキュラムとオンタリオ州のベスト・スタート計画や枠組みとの関連に着目した各国の特徴が分析されている。具体的には、米国のハイ・スコープや、レッジョ・エミリアのドキュメンテーションや環境の役割はオンタリオでも認められる方が良いという指摘や、オーストラリア・タスマニアのドキュメンテーション

(ラーニング・ストーリー等) と0歳から16歳までの全体的なカリキュラムが優れているということ、イギリスのカリキュラムは小学校のカリキュラムに明確に結びつき、連続性を持っている点で有益であること、日本の保育の5領域も枠組みの策定にあたって考慮する価値があることが示されている。

これらの検討から、ケアと学びは分けられるものではなく、学びと早期の発達を支えるケアし養育する環境が早期学習のための枠組みの重要な要素となること、特定のカリキュラムを開発するのではなく、カリキュラムとペダゴジーの枠組みに焦点化すること、子どもの発達に引き続き焦点化すること、年齢に応じて期待される行動を評価するのではなく、0歳から8歳までに拡張した「発達の連続体」という文脈の中に子どもを位置付けること、子どもの成長と学びに関する多様なエビデンスや観点を認識すること、あらゆるタイプの幼児教育機関で専門職の人のための実践的なドキュメンテーションを準備すること、この枠組みと改訂された幼稚園プログラムとを調整することを中心にELECTが策定されていくこととなった (Ontario Ministry of Education 2007: 3-4)。

また、『乳幼児期の研究』の勧告10で提案されていた、就学前の子どものレディネスの測定指標も開発された。指標は、マクマスター大学のオフォード子ども研究センター (Offord centre for child studies) のオフォード (Offord, D.) とジェイナス (Janus, M.) によって開発され、1998年にオンタリオ州でのパイロット調査を経て、2000年に「幼児期の発達指標 (Early development instrument: EDI)」が完成した<sup>4</sup>。EDIの特徴は、以下の3点にある。まず、これまでの指標が「学校に入るための」レディネス測定であったのに対して、「学習に対する」レディネスに焦点をあてた点、次に、その対象を4～5歳の学校での学習を基盤とする認知的側面の狭い範囲から0～8歳までに拡張し、乳幼児の発達の新しい領域 (情緒など) を指標に取り入れた点、そして、障害があるかどうかなどについて専門家のテストによって個人を判定するのではなく、教師による子どものチェックを通して、ヴァルネラブルな状況や危機的状況にあるかどうかをコミュニティや集団として測定することに主眼が置かれた点で、従来の調査とは異なる指標であった (Janus, M. and Offord, D, 2000: 12-13)。

EDIの概念枠組みはカガン (Kagan) とドハーティ (Doherty) によるものであり、測定領域として、学校ベースの認知領域以外にも、「身体の健康と幸福

(physical health and well-being)」「社会的な能力 (social competency)」「情緒的成長 (emotional maturity)」「言語と認知的発達 (language and cognitive development)」「コミュニケーション・スキルと一般知識 (communication skills and general knowledge)」の5領域が設定されている。その測定項目については、ほとんどの項目は「カナダの子ども・若者に関する横断研究 (Canadian national longitudinal study of children and youth: NLSCY)」において用いられた項目が採用され、104項目がリスト化された (Janus, M. and Offord, D. 2007, Janus, M., Brinkman S., Duke, E., Hertzman, C., Santos, R., Sayers, M., Schroeder, J and Walsh, C. 2007: 3-4)<sup>5</sup>。EDIはカナダの他州でも利用されていくが、オンタリオ州では広く受け入れられた指標となる。そして、上記の5領域がELECTにおける発達の領域としても引き継がれていくことになった。ELECTの作成にあたっては、『乳幼児期の研究』を中心としながら、OECDの調査研究や幼児教育の国内外のカリキュラムの検討を通して、オンタリオ州の文脈に合わせた子どもの発達の領域や項目が模索された。

### C ELECTの特徴

2007年に発表されたELECTは、チャイルド・ケア・センターや幼稚園の教室や家庭や様々なプログラムやサービス等で実施されている、オンタリオ州の幼児教育におけるカリキュラムとバダゴジーを支援するための指針 (guide) である。また、ELECTは、現在オンタリオ州で実施されている幼児教育のカリキュラムやさまざまな教育的なアプローチに置き換えられるものではなく、補完したり方向性を与えたりすることを目指し、さまざまな機関で幼児教育に携わる実践者やケアする人々を支えるための、発達のスキルの連続性や共通のことばとなることを目的としている (p. 3)。

ELECTは、本編が「基本原理 (principle)」「子どもの発達の理解」「実践に生かす」「アセスメント・評価・モニター」(pp.1-84)と用語解説 (pp. 85-92)の他に、付録1「国際的なカリキュラム・フレームワークの検討」(pp. 93-142.)、付録2「ベストスタート：保護者の関り」(pp. 143-158.)、付録3「ベストスタートのビジョンに示される多様性・公正・インクルージョン」(pp. 159-164.)から構成されている。以下、内容について概観する。

まず、「基本原理」では次の①～⑥の6つの基本的な考え方が表明されている。

①乳幼児期の発達は、生涯にわたる学習・行動・健

康の基礎となる

- ②家庭と地域の協力は、子どものニーズに応じる乳幼児期の環境の力を高める
- ③発達と学習を最大化するための前提条件は、多様性・公平性・インクルージョンの実現である
- ④計画されたカリキュラムが早期学習を支援する
- ⑤遊びは、子どもの自然な好奇心と活力を発揮させる早期学習のための手段である
- ⑥知性に富み応答できる実践者は、乳幼児期の欠かせない存在である

この6つの基本原理は、『乳幼児期の研究』およびマスタートによる脳の発達と乳幼児期の発達の重要性を示す科学的研究の知見 (Musterd 2006) を中心として、親や家族による子どもへの関りやコミュニティにおける幼児教育機関の役割や機能に関する多くの研究結果を基盤として生み出されている。なかでも特徴的なのは、③ではベスト・スタートのビジョンで示されていた多様性・公平性・インクルージョンの実現が目指され、さまざまな社会・文化的背景を持つ人々のなかで、乳幼児教育機関がこれらの原理と信念を促進し、そこですべての子どもが等しい権利と固有の視点をもつ市民として世界に参加するという価値を重視している (Ontario Ministry of Education 2007:11)。また、⑤において遊びが重視された点も特徴的である。『乳幼児期の研究』においても遊びを中心とする問題解決が注目されていたが、ELECTでは遊びが子どもの学びを促進し、子どもが遊び、世界を探究し、大人や仲間と関わるときに最も学ぶことができることを強調している。⑥では、「反省的実践家」であることが強調され、子どもの行動や経験や遊び、そして家族やその他のケアに関わる人に応答する幼児教育の実践者が子どもの育つ環境を生み出すことの重要性が示されている。

次に「子どもの発達の理解」では、0～8歳までの乳幼児期の発達について、0～24か月 (乳児)、14か月～3歳 (幼児)、2歳半～6歳 (就学前・幼稚園児)、5～8歳 (学齡児童)の重なり合う4つの時期区分に分け、発達の領域を「1. 社会性」「2. 情動」「3. コミュニケーション・言語・リテラシー」「4. 認知」「5. 身体」の5領域に即して、早期教育の枠組みが45頁にわたって示されている。そして、とくに、乳児から学齡児童までの発達の進展の特徴を説明する「発達の連続体 (The continuum of development)」が示されていることは特徴的であり、発達の連続体は乳幼児教育の実践者が子どもの発達を理解するための枠組みの中心的

な要素となっている。

具体的には、5領域のなかに基本的なスキルが数項目設定され、その基本的なスキルの中にいくつかの指標が示され、大人と子どものコミュニケーションや関連する活動などのやり取りの事例が示されている。たとえば、最も多くのページを占める2歳半～6歳の枠組みをみると、「1. 社会性」には9つの基本的なスキルが示され、その中に47の指標が挙げられている。つづいて、「2. 情動」には6つの基本的なスキルの中に35指標が、「3. コミュニケーション・言語・リテラシー」には14の基本的なスキルの中に64指標が、「4. 認知」には22の基本的なスキルの中に104指標が、「5. 身体」には4つの基本的なスキルの中に37指標、合計55の基本的スキルと287の指標が掲げられている。

この枠組みについては、発達側面が相互に関連し合っていること (p. 21) や、発達の連続体が子どもの発達を評価したり発達の困難を確定したりするための判定ツールではない (p. 22) ということが明記されている。むしろ、この発達の連続体としての枠組みは、さまざまな乳幼児教育の場におけるカリキュラムやペダゴジーを実施するための土台としての一連の発達を明示する指針であり、乳幼児教育の実践者や家族が子どものスキルの向上についての情報を交換し、子どもの発達の理解に則って子どものスキルを観察し記録するためのツールとして役立ち得ることが述べられている。

「実践に活かす」のセクションでは、家庭や乳幼児センターや職場の子どものケアセンターやアボリジナル・ヘッド・スタートなどの具体的な幼児教育の場での活用事例が描かれ、乳幼児に関わる機関や実践者が子どもの発達の原理や理解を行動に移していくための「実践のためのガイドライン」が示されている。このガイドラインは、幼児教育の実践者がいかに環境を組織し、子どもたちと関わるかが描かれており、6つの基本原理と子どもの発達に則って具体的な支援や計画や取組みの実践が挙げられている。

「アセスメント、エヴァリュエーション、モニタリング」のセクションでは、ELECTの利用を支援するための方策が述べられている。ELECTでは、評価を「アセスメント」と「エヴァリュエーション」と「モニタリング」の3つに区分している。アセスメントは子ども個人とその発達を評価し、エヴァリュエーションは幼児教育の環境やプログラムや枠組み等の実施を評価し、モニタリングはコミュニティや州レベルでのELECTの影響を特定し測定することを評価する。子

どもの評価としては、継続的な子どもの発達の観察やドキュメンテーションや、子どもの実際の特有の経験を描くラーニング・ストーリーがその方法として挙げられている。プログラムの評価については、ここでは、子どもの発達と学習を支援する関りと関係性のみならず、プログラムとペダゴジーの内容が評価対象とされている。コミュニティレベルでの影響の評価については、EDIによる測定が受け入れられており、幼児教育機関はEDIのコミュニティレベルのデータを利用してプログラムの改善ができ、コミュニティは特定の対象を定め、対象に応じた計画やモニタリングのメカニズムを開発することが可能になると述べられている。

以上のようにELECTの策定準備の段階では、OECDによる幼児教育の枠組みや各国における魅力的な取組みが着目され、ELECTの子どもの個人の評価においても、国内外の幼児教育のカリキュラムの検討で評価されていた、レッジョ・エミリアやタスマニアのドキュメンテーションの方法が反映されていることがわかる。しかし、もう一方で、「発達の連続体」として各年齢・発達段階に応じた領域に数多くのスキルと指標が設定され、評価の指標としてEDIの利用が設計されていた。ELECTは、子どもの発達や遊びに着目して多様な実践を許容する可能性と、数多く設定されたスキル・指標とその評価によって幼児教育の実践の方向性を規定する危険性の両方を含む幼児教育の指針であったといえよう。

### 3 全日制幼稚園における『今日のすべての乳幼児のための学習 (ELECT)』の機能

オンタリオ州の全日制幼稚園は、2007年から制度の構想が始まり、2010年から実施されている。その過程において、ELECTは多様な位相で想定を超えたかたちで機能し、全日制幼稚園を特徴付けている。本章では、その様相を明らかにする。

#### A パスカル報告における政策提言

2007年10月に第二次マギンティ政権が誕生する。トロント大学OISEの教授チャールズ・パスカルが、乳幼児教育政策を担当する州首相特別顧問に任命され、「ベスト・スタート計画」の成果に基づき0歳から12歳の子どもと家庭を支援するための政策提言を行うことになる (犬塚 2017)。そして2009年6月に、首相への政策提言「我々の最高の未来を考えて：オンタリオにおける幼児の学習の実施」、通称パスカル報告が公

表される (Pascal, 2009)。この提言は、子どもとその家族を対象に、包括的、継続的、統合的なシステムを構築する方法を説明するものである。オンタリオ州の主要な課題は、幼児向けのサービスがバラバラで断片化されているために、子どもたちの最善の利益を損なっているという点に指摘されている。そしてその課題を解決するために、4歳児と5歳児の全日制幼稚園、6歳から8歳の子どもの延長プログラム、9歳から12歳の放課後プログラムが構想されている。

パスカル報告は、具体的な20の政策提言を行っている。そのうちELECTへの言及がなされているのは、プログラムに関する10項と11項、スクリーニングに関する12項、プログラムとシステムのモニタリングに関する18項、実施プロセスを述べた20項である。

ELECTの全日制幼稚園における機能を考える上で10項は重要である。パスカルは、オンタリオ州の乳幼児期のすべての環境に共通のプログラムの枠組みが必要であるとし、その共通の枠組みをELECTに求めている。着目したいのは、ELECTの「発達連続体」が、子どもが発達の領域で「獲得することの期待される技能の順序」の概説とされ、カリキュラム開発のための観察と記録を支援するものとして位置付けられている点である。そして実際に、教師の多くが、子どもの学習と発達の進歩を見てとりモニターするために「発達連続体」を利用しているとされる。さらに、行政がオンタリオ州内の7カ所でELECTのパイロット事業を行っていること、複数の大学が幼児教育の教師教育プログラムにELECTを導入していること、ジョージ・ブラウン大学で「発達連続体」を用いて個々の子どもの学習を観察し記録する電子ツールとリソースを開発していることが報告されている。

カリキュラム・ガイドラインの「乳幼児の学習プログラム」についても、共有される原則かつアプローチとしてのELECTと、現行の「幼稚園教育プログラム」を出発点として構成するとされている。「幼児の学習プログラム」に含まれるべき要素は四つ挙げられている。一つめは、発達スキルであり、後の発達と学習の基礎となる能力やコンピテンスである。二つめは、必須とされるアウトカムであり、小学校入学時に子どもが身につけておくべき知識、技能、戦略である。三つめは、子どもたちが学びを示す方法であり、現行の「幼稚園教育プログラム」とELECTの指標を組み合わせ例示することが想定されている。四つめは、学習環境における相互作用、子どもと大人、子どもどうし、大人どうしの相互作用の例である。

もう一つ、着目したいのは、18項の評価に関わる提言である。幼児課の仕事として、統合的なアカウントビリティの仕組みである「乳幼児指標 (Early Years Index)」を開発実施することが示され、そこにELECTにおける発達上のアウトカムと、子育て支援センターの運営、幼児の学習プログラム、延長プログラムの3つのプログラムを結びつける評価ツールを含むことが提言されている。「乳幼児指標」を用いて評価される内容には、コストや投資レベル等のリソース、どの家族がどのサービスを使用しているかというアクセス等だけでなく、EDIとKPS (幼稚園親調査)、3年生と6年生の学力調査 (EQAO) による学校評価などの多様な指標を用いた子どもと家族の追跡調査が含まれている。特に重視されているのはEDIであり、その時間的な経過を追跡することで、政府、学校、政府機関はプログラムの影響を評価できるとされている。

他の項目におけるELECTの位置づけは以下の通りである。11項では、アボリジニの教育者や組織と協力してELECTの適応をはかり、ELECTをすべての幼児において使用できるようにするとの提言がなされている。12項では、親が自分の子どもについての情報を得ることができるように、幼児のスクリーニングのプロトコルに、NDDS (Nipissing District Developmental Screen)<sup>6</sup>とELECTの「発達連続体」を組み込み、教師の観察と記録を強化することが提起されている。20項のタイムスケジュールでは、ELECTと「発達連続体」を、カリキュラムとペダゴジーの枠組みとして確立し、その使用を支援する州全体の訓練計画を策定することが挙げられている。

以上のように、全日制幼稚園をデザインしたパスカル報告において、ELECTとその「発達連続体」は、カリキュラムの構成、評価、スクリーニングに汎用されることになっていた。ELECTのそもそもの想定を超えて、技術的な適用が図られているといえよう。ダールベリらは発達評価の機能を批判して、「子どもがどうあるべきかを決定する標準化のテクノロジーである発達評価をもって、子どもは標準化の対象にされる」と警鐘を鳴らしている (Dahlberg, Moss and Pence 2013: 39) が、パスカル報告におけるELECTとEDIのセットは、このような発達指標と評価の関係を予期させる。

実際に、キャラハンとエイヴリー (Callaghan and Avery 2015) は、ELECTに関わって次のような問題が生じたことを指摘している。第一に、ELECTはスクリーニングや評価のために開発されたものではないのに、子どもの発達の評価に用いられた。第二に、「発

達の連続体」は乳幼児教育士の専門的知識とみなされるようになり、養成機関で教えられるようになった。第三に、実践をスタンダード化して、表向きのアカウンタビリティを提供するために、チェックリストと評価尺度が多く用いられるようになった。キャラハンらによれば、このような事態は教育実践に役立つものではなく、その逆のかたちで機能した。批判的で探究的な実践に従事していた教師は、コンプライアンスの文化に適應するために勢力を削がれ、教育ドキュメンテーションを作成していた教師は、その時間を奪われたという。以下、全日制幼稚園の実施と評価に即して、ELECTの機能を確認する。

### B 全日制幼稚園の実施と「全日制幼稚園学習プログラム」

2010年4月に「乳幼児教育士、幼稚園、延長プログラム、その他の事項に関して教育法を修正する法律」が成立し、全日制幼稚園の制度化が実施された。幼児教育課の次官グループが各教育委員会にあてた通達は、パスカル報告と同様に、全日制幼稚園を提供すること、その指導の枠組みはELECTによること、「全日制幼稚園学習プログラム」が公表されることを示していた(Grieve 2010)。実際に、「全日制幼稚園学習プログラム(草案)2010-2011(以下、「プログラム」)」は、ELECTをふまえ、その内容を踏襲するものとなっていた。

「プログラム」は7章からなる。イントロダクションの冒頭には、ELECTの6つの原則が引用され、「プログラム」を貫く原則となることが確認されている。2章から5章では、「学習共同体の構築」、「教育/学習のアプローチ」、「学習プログラム」、「アセスメント、エバリュエーション、報告」のそれぞれのテーマに即して、「プログラム」の立場が表明されている。6章では学習プログラムの計画にあたって考慮すべきことが論じられ、7章では学習領域と期待されることが表のかたちで提示されている。6つの原則はそれぞれの章において繰り返し引用されている。たとえば親とコミュニティの役割を示す箇所ではパートナーシップの重要性を宣言する原則2が、英語学習者や特別支援の子どもの教育を論じる箇所では多様性、公正性、包摂性を求める原則3が引用されている。

ここでは「プログラム」の特徴のうち、以下の三点に着目しておきたい。第一に、「教育/学習のアプローチ」として遊びを基盤とする学習という原則5が確認されているが、ここでの学びは、問題解決、言語習得、

読み書き能力、計算能力、社会的・身体的・感情的スキルといった断片化された分野との関係で捉えられている。たとえば食料品店の訪問について、読み書き能力(標識やラベルを読むこと)、計算能力(数字の使い方を変えたり、形を探したりすること)、社会的技能(他の人のアイデアを聴く、順番を守る)を発達させることができると説明されている(p.16)。第二に、プログラムの計画にあたって発達の領域を考慮することが求められている。プログラムは、人間の発達には複雑で多様であるとしながらも、身体的、社会的、情動的、認知的、コミュニケーション/言語という発達の5つの領域におけるスキルは、おおむね予測可能な順序で現れる可能性が高いとし、領域ごとに「子どもの振る舞い」と「考慮すべきこと」が列挙されている(pp.33-35)。第三に、「学習領域:プログラムで期待されること」は、個人的社会的発達、言語、数学、科学とテクノロジー、健康と身体活動、アートという7領域に分けられ、それぞれの領域ごとに「期待されること」、「子どもの学習の現れ(言葉、行動、表現)」、「教師チームのなすべきこと(応答、挑戦、拡張)」が示された表が作成されている。結果的にこの「プログラム」は、子どもの遊びを領域ごとに分断された発達と学びの束としてみならず全体像を構成しているといえよう。

### C 遊びに基づく保育の困難

全日制幼稚園は2010年9月から5期に分けて導入され、2014年9月に州の4、5歳児全てが参加することになっていた。このうち2期までの時点で、マクマスター大学とクイーンズ大学の二つのグループによる評価が行われ、それをふまえてオンタリオ教育省による総括的な評価が行われている(佐藤2017)。

一つめのマクマスター大学のグループによる評価は、「全日制幼稚園学習プログラム最終報告書」(Janus, Duku and Schell 2012)としてまとめられている。この調査は、子どもの発達に対する全日制幼稚園の影響の可能性を示すことを目的としており、発達の指標としてEDIが用いられ、全日制幼稚園に2年間通った子ども、1年間通った子ども、通っていない子どものヴァルネラビリティの変化の比較が行われている。その結果は、2年間通園郡より1年通園群の方がヴァルネラビリティの低下の割合が大きいなど、必ずしも全日制幼稚園への期待を満たすものではなかった。報告書はこの結果について、第1フェーズと第2フェーズの実施は新規性があるがゆえに困難だった可能性を指摘している。またオンタリオ教育省(Ontario Ministry of



Education 2013a) は、この結果について、全日制幼稚園が子どものリスク低下にプラスの影響を及ぼしたとしつつ、その影響を過小評価しないためには継続的な調査が必要だとした。

もう一つのクイーンズ大学の社会問題評価グループが行った調査は、量的調査と質的調査からなり、報告書「オンタリオ州全日制幼稚園学習プログラムの実施評価」(Vanderlee, Youmans, Peters and Eastabrook 2012) が出されている。質的調査はケーススタディのかたちで行われ、教育者チーム、専門能力開発、遊びに基づく学習、評価、環境、家族パートナーシップ、コミュニティ・パートナーシップなど、テーマごとに考察がなされている。なかでも具体的に園の様子が検討されているのは、遊びに基づく学習に関わる実施状況である。「プログラム」との関係で、適合度が高位、中位、定位の園が選択され、それぞれの1日の様子がありありと描出されている。適合度の低い園の様子は、次のようである。朝、子どもたちが園に来て、カーベットのところに集まる。カレンダーの活動を行った後、3人の子どもがショウ・アンド・テルを行い、読み書きのレッスンに進む。お気に入りの人形で遊びたいオリビアは、ワークシートの課題を急いでやるが、のりがはみ出しているため先生からやり直すよう言われがっかりする。みんなが遊んでいるところで、教師は数人の子どもの遊びを辞めさせて読みの教育を行い、そのアセスメントを完了させる。スナックの後、子どもたちは15分間の屋外遊びを行う。次に物語を聞き、好きな場面を絵に描き文章をつけるという作文の課題を行う。ランチの後は科学の授業、数学と続く。数学の先生は特別な支援を必要とする子どもたちがじっとしてられないことに苛立ち、その2人を机のところでじっとしているよう言う。1日の最後の自由遊びは、すべての課題を終えていなければならない。オリビアは読み書きのワークシートをやり直し、ようやく人形で遊ぶことができた (pp.40-42)。

これをふまえて、レポートは遊びに基づく学習について二つの課題を指摘している。一つは、遊びに基づく学習と教育委員会が重視する読み書きや計算能力の指導を、どのように統合すればいいかわからないという問題である。もう一つは、コーナーを設けたラーニング・センター方式を、よりオープンな遊びに基づく学習だと誤解していることである。レポートは、全日制幼稚園の実施が進むとともに、遊びに基づく学習とその利点について理解を深める必要があると述べている (p.6)。教育省 (Ontario Ministry of Education

2013a) はこれを受けて、遊びに基づく学習に関する知識の普及に注力すべきこと、継続的な専門的能力の開発をリソースによってサポートする必要があることを述べている。そして実際に、付属文書としてリソースのリスト「教育省乳幼児の学習のリソース (Ministry of Education Early Learning Resources) 2013-14」を作成している。このリストは順次追加されており、現在入手可能なものは2015-16版だが<sup>7</sup>、ここに『考える、感じる、行動する』、『オンタリオ乳幼児政策フレームワーク』、HDLHといったレッジョ・インスパイアの教師用リソースが含まれている。遊びに基づく学習の理解という課題が、これらのリソースの作成につながったと考えられる。

#### 4 レッジョのアイデアの導入過程

2012年から、オンタリオの幼児教育政策文書にレッジョのアイデアが導入される。具体的には、学力課の作成する教師用リソースにレッジョ・インスパイアのテーマが現れ、2013年には教師向けのリソース『考える、感じる、行動する』と政策文書『オンタリオ乳幼児政策フレームワーク』が、2014年にHDLHが作成される。本節では、政策にレッジョのアイデアが導入された過程とその意義を明らかにする。

##### A オンタリオにおけるレッジョ・インスピレーションの展開

オンタリオ州で、早い時期からレッジョ・インスパイアの実践を発展させていたのは、私立のボーディング・スクール、ビショップ・ストラチャン・スクール (Bishop Strachan School, 以下BSS) である。同校のジュニアスクール校長のハントによれば、他の私立学校の教育と差異化するために、2000年頃にレッジョの原則を学校の特徴とすることに決めたという。同校は、環境が第三の教師であるというレッジョの原則に基づいて透過性がある校舎を建築し、教師を6年間にわたってレッジョのスタディー・ツアーに派遣した。アトリエリスタの役割を果たす教師は、タイのレッジョ・インスパイアの学校で2年間の経験を積んだという。幼稚園からスタートしたBSSの改革は、小学校の全学年におよび、2019年には中学校での取り組みが模索されていた<sup>8</sup>。レッジョ・インスパイアの実践は、一般的には幼児教育に限定されており、同校の取り組みは世界的にみても珍しい。次項で見ると、オンタリオの教育行政は、幼児教育を中心にしながらもk-12の範囲

でレッジョのアイデアを取り入れているが、その背景には同校の取り組みがあると考えられる。

私立のBSSが先駆的にレッジョ・インスパイアの実践に取り組んでいたことは、オンタリオの幼児教育政策にレッジョの考え方を導入するにあたって重要な意味を持った。2006年に、レッジョ・エミリア市の幼児教育の展覧会「子どもたちの100の言葉」が開催された際に、BSSは、ヨーク大学、トロント地域教育委員会、セネカカレッジとともに共同開催者となった。この協働が発展するかたちで、オンタリオレッジョ協会が結成されている<sup>9</sup>。キャラハンらオンタリオレッジョ協会のメンバーは、幼児教育課から幼稚園の発展について相談を受けた時に、次官のグループや行政官とBSSの見学を行いレッジョ・インスピレーションの理解を促した。キャラハンによれば、レッジョのアイデアで学んできた同校の子どもたちは、州の小学校3年生の学力テストで高い成績をおさめており、このことがレッジョのアイデアに行政が興味を持つ後押しになった。このようにして、テストのスコアが「全て」であったオンタリオ州の教育行政が、逆説的なことに、それとは異質な性格を持つレッジョのアイデアを導入し、その関心を変化させていくことになる<sup>10</sup>。

## B 政策立案者との協働

オンタリオレッジョ協会は、2011年にレッジョ・エミリアで1週間の研究集会を開催した。この時に、教育省の幼児教育課の行政官2名をゲストとして招待している。また省内では、幼児教育課と他の部署との対話が行われ、あらゆる年齢の生徒の学習、発達、健康、福祉にとって最も重要なものは何かということについて理解を深めたという。その一つの方法として、スーザン・フレイザーの『真正の子ども期：教室におけるレッジョ・エミリアの経験 (*Authentic Childhood: Experiencing Reggio Emilia in the Classroom*)』(2011)の検討が行われた。同書はレッジョの基本的なアイデアが記された入門書的なテキストである。このフレイザーの書は、行政の文書で多く引用されることとなった。

レッジョのアイデアはまず、教育省学力課が、リーダーシップと教育効果を支援するために作成した教師用のリソース「キャパシティー・ビルディング・シリーズ」に現れている。そのペーパーは2007年から2018年まで年に数本ずつ作成され、テーマは教師の学習共同体、英語学習者である子ども、子どものアイデンティティ、アセスメントなど多岐にわたる。レッ

ジョのアイデアを含んでいるペーパーに、「第三の教師：K-8の数学とリテラシーのために環境をデザインする」(2012年7月)、「教育ドキュメンテーション：幼年期とその後の主要な学習」(2012年10月)、「生徒の声：関係を変革する」(2013年9月)、「教育ドキュメンテーション再考：アセスメントと学習を新しい方途でみる」(2015年1月)がある(Ontario Ministry of Education Student Achievement Division, 2012a, 2012b, 2013, 2015)。「第三の教師」と「生徒の声」の場合はレッジョのアイデアが部分的に取り入れられたものだが、「教育ドキュメンテーション」と「教育ドキュメンテーション再考」はレッジョのアイデアを主とするペーパーである。この二つの論考からは、レッジョ・インスピレーションの拡張と深化が垣間見える。2012年の「教育ドキュメンテーション」は、K-2の教師を対象としてドキュメンテーションを概説している。ドキュメンテーションは「傾聴の教育」(リナルディ)の実践であり、子どもや教師の考えが可視化され、子どもを「有能な学習者」と見ること、子どもの声を教育に取り入れること、子どもや親、地域、管理職、自分へのアカウンタビリティを可能にするとされる。2015年の「教育ドキュメンテーション再考」では、ドキュメンテーションをK-12へと拡張されるとともに、「観察」と「評価」の意味の変化が明記されている。すなわち、従来の観察と記録は生徒の学習を評価するツールとして用いられてきたが、教育ドキュメンテーションにおける観察と評価は、子どもの思考と問題解決の強さや方法を発見し、子どもの学習を「見る」可能性を開くとしている。

2013年には、『考える、感じる、行動する』(Ministry of Education 2013b)と題された文書とビデオからなる教師用リソースが作成されている。文書は、「大人と子どもの積極的な関係性の力：鍵となる繋がり」、「環境は教師である」、「教育的リーダーシップ」、「落ち着く、注意を払う、幸せ」、「教育ドキュメンテーションを通して学びを可視化する」、「すべての人が歓迎される：乳幼児のインクルーシブな保育」の6つの研究の概要で構成されている。オンタリオレッジョ協会のメンバーのうち、キャラハンが環境を、ウィーンがドキュメンテーションを担当している。他の寄稿者も、オンタリオレッジョ協会のイベントへの参加経験があった(Callaghan and Avery 2015)。実際に、イントロダクションでは、文書を貫いている「共通の見解」が、「子どもは有能であり、複雑な思考が可能であり、好奇心があり、可能性に富んでいる」というレッジョ

の哲学によって表現されている。

この特徴的な子どもの見方は、グリーブらが作成した「オンタリオ乳幼児政策フレームワーク」(Ministry of Education 2013c)にも導入されている。フレームワークは「我々のすべての子どもへの責任」と題して、次のように述べている。「我々は子どもたちを、有能で、複雑な思考ができ、好奇心が強く、可能性に富んでいると考えている。彼ら彼女らは、多様な社会的、文化的、言語的パースペクティブを持った家族の中で成長する。すべての子どもは、自分がとりまく環境に帰属し、それに貢献している貴重な存在であり、成功する機会を与えられていると感じるべきである。子どもたちが有能で好奇心に満ちていることがわかれば、子どもたちの強さや能力を活かしたプログラムやサービスを提供できる可能性が高くなる」(p.7)。このフレームワークは、ある程度『乳幼児期の研究』やパスカル報告を引き継ぐかたちで構成されており、たとえば乳幼児の学習の重要性をいう文脈で、脳の発達研究や乳幼児への投資の効果について言及している。しかし、パスカル報告がフレームワークに含めることを提言していた項目のうちの幾つかについては、周到に省かれている。一つは、ELECTとその「発達の連続体」である。もう一つは「乳幼児指標」とそこに含む予定であったEDIであり、フレームワークはそもそも評価についてあまり述べていない。「発達の連続体」やEDIにおける断片化された子どもの見方と、社会に参加する「有能な子ども」という子どもの見方は、明白に異なっている。フレームワークはレジャ・インスパイアの子どもの見方を選択したといえよう。

##### 5. 『学習はどのように生起するか (HDLH)』の登場によるペダゴジーの転換

本稿の冒頭で述べたように、2014年にオンタリオ教育省から出された『学習はどのように生起するか (HDLH)』は、ELECTの発達の物語への抵抗として作成された政策文書である。しかし、その抵抗の示し方は、ELECTを正面から否定するのではなく、むしろ、ELECTの内容を踏まえつつ、その機能の仕方を変容させるというかたちをとっており、そこで中心的な役割をはたしたのが、レジャ・エミリアの教育哲学と教育アプローチである。以下では、HDLHの具体的な内容や機能について踏み込んだ分析を行いながら、この政策文書がどのような抵抗の物語を打ち出し、そして、その新しい物語がオンタリオ州の幼児教育に、い

かなる意味をもたらしたのかを検討していく。

##### A 『学習はどのように生起するか (HDLH)』の特徴

HDLHは、0歳から8歳までの乳幼児期の保育や教育に携わる教育者に向けた「専門的な学びのリソース・ガイド (professional learning resource guide)」である。ここでいう教育者とは、学校や幼稚園の教師だけでなく、チャイルドケア・センターや学校外の親子プログラムなど、さまざまな領域に関わる人々を含んでいる。HDLHのイントロダクションには、この政策文書が、教育者たちに回答を提供するものではなく、むしろ、疑問や質問を喚起するためのものであることが明示されている。なぜなら、HDLHでは、わきあがった疑問や質問について探究するなかでこそ、学びが生起する (learning happens) と考えられているからである。ここに、なぜオンタリオ教育省が、この抵抗の物語に「学習はどのように生起するか? (How Does Learning Happen?)」というタイトルをつけたのかという理由が端的に表れている。つまり、HDLHは、「学習はどのように生起するか?」という問いに回答を与えるための政策文書ではなく、この問いをめぐるさらなる問いが生まれ、幼児教育者の「専門的な学び」が発展していくことを企図したものだと考えられる。

さらに、HDLHのイントロダクションには、この政策文書の特徴づける2つのポイントに関する説明が記載されている。一つは、HDLHにおける「子ども観、家族観、教育者観」について、そしてもう一つは、HDLHにおける「4つの基盤 (foundation)」についてである。

##### 1 『学習はどのように生起するか (HDLH)』における「子ども観、家族観、教育者観」

HDLHでは、子どもも家族も教育者もすべて「有能であり、複雑な思考が可能であり、好奇心があり、可能性に富んでいる」存在としてとらえている。これは、先述のように、同じオンタリオ教育省から出された『考える、感じる、行動する』のイントロダクションで、「共通の見解」として提示された「子ども観」と同一のものであり、レジャ・エミリア教育の根底にある、いわば教育哲学といえるものである。HDLHは、このレジャの「子ども観」を家族や教育者にも拡張し、子ども・家族・教師に通底する人間観として提起していると考えられる。そして、このHDLHに示されている「子ども観、家族観、教育者観」は、オンタリオ州の幼児教育に大きな転換をもたらし、州全体の幼児教育政策の中心的な指針として位置づけられたもの

である (Callaghan and Avery 2015)。ORA代表のキャラハンによれば、HDLHのような政策文書が、子ども・家族・教育者とはどのような存在なのかという、ある種、自明のものと思われがちなことについて語るところから始まっていること自体が、オンタリオ州の幼児教育の大きな転換を象徴するものだったという<sup>11</sup>。

2 HDLHにおける「4つの基盤 (foundation)」

HDLHは、「所属 (Belonging)」「幸福 (Well-Being)」「没頭 (Engagement)」「表現 (Expression)」という4つの基盤を提示している。これらの基盤は、子どもたちの未来の可能性に関するヴィジョンであり、同時に、日々の過ごし方の指針でもある。ELECTでは「基本原理 (principle)」という言葉を使用していたのに対し、HDLHでは「基盤 (foundation)」という表現が採用されている。この理由は明示されていないのだが、HDLHの他の箇所をみると、「これらの基盤、つまり人間のありかた (These foundations, or ways of being)」(Ontario Ministry of Education 2007, p.7) と言い換えていることから、HDLHにおける「基盤」とは、人として生きるために不可欠な土台といった意味が込められているのではないかと推測できる。

つぎに示す表1は、「所属」「幸福」「没頭」「表現」それぞれの基盤に関する「子どもにとっての目標」と「プログラムに期待すること」をまとめたものである。

表1に記載されている「子どもにとっての目標」とは、HDLHの根底にある「子ども観」、すなわち「有能で可能性に富む存在」としての子どもが、「所属」「幸福」「没頭」「表現」それぞれの基盤に関わってあるべき姿を端的に示したものである。また、「プログラムに期待すること」とは、各基盤で目指す子どもの姿を実現するためのプログラムの方向性についてまとめた

ものとなっている。ただし、いずれも、これで完全に必要な項目を網羅しているわけではなく、今後あらたな事項を付け加えたり修正したりするための出発点として作成したものであるという説明が付されている。さらに、「子どもにとっての目標」に関しては、「達成すべき課題のチェックリストや到達基準を示すベンチマークとして使用するものではない」(Ontario Ministry of Education 2014a, p.12) と注意喚起も加えている。こうした説明や注意喚起は、ELECTが、結局チェックリストやベンチマークとして普及してしまったこれまでの経緯を踏まえ、HDLHが同じ轍を踏まないための配慮だと考えられる。

しかしながら、HDLHとELECTはまったく無関係のものではなく、ELECTを踏まえてHDLHが作成されていることはすでに述べた通りである。そのため、HDLHが示す4つの基盤は、上述のELECTの6つの基本原理を統合するものであり、「子どもにとっての目標」や「プログラムに期待すること」を、いかにELECTの6つの基本原理と関連付け、有機的に機能させるかを構想する際に役立つと述べられている。

B ELECTからHDLHへの転換

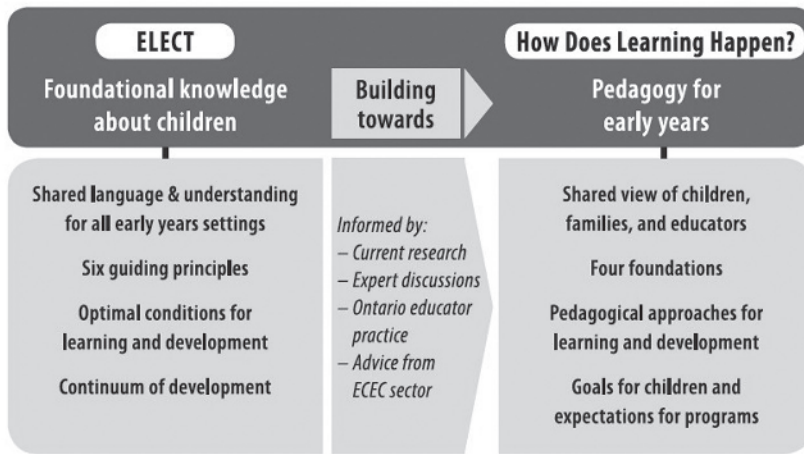
ここで、ELECTとHDLHの関係を整理しておこう。両者の関係は、HDLHに記載されている以下の図1にわかりやすくまとめられている。この図は、端的に言うところ、ELECTの「子どもに関する基礎的な知識」を踏まえつつも、「最新の研究」や「専門家の議論」等を介してELECTを吟味することにより、HDLHという新たな「幼児期のペダゴジー」をつくりあげた、という関係を示すものである。そして、この図の中央に位置する「最新の研究」や「専門家の議論」のなかで、

表 1 : HDLHの「4つの基盤 (foundation)」

FOUNDATIONS	GOALS FOR CHILDREN	EXPECTATIONS FOR PROGRAMS
Belonging	Every child has a sense of belonging when he or she is connected to others and contributes to their world.	Early childhood programs cultivate authentic, caring relationships and connections to create a sense of belonging among and between children, adults, and the world around them.
Well-Being	Every child is developing a sense of self, health, and well-being.	Early childhood programs nurture children's healthy development and support their growing sense of self.
Engagement	Every child is an active and engaged learner who explores the world with body, mind, and senses.	Early childhood programs provide environments and experiences to engage children in active, creative, and meaningful exploration, play, and inquiry.
Expression	Every child is a capable communicator who expresses himself or herself in many ways.	Early childhood programs foster communication and expression in all forms.

(Ontario Ministry of Education 2014a, p.23)

図 1 : ELECTとHDLHの関係



(Ontario Ministry of Education 2014a, p.5)

中心的な役割をはたしたのが、レジジョ・エミリアの教育だったと考えられる。

確かに、図1は、ELECTを踏まえてHDLHが作成されたという両者の関連を簡潔に示しているためわかりやすい。しかしながら、ここで留意しておかなければならないことは、現実問題として、両者は内容も構成も大きく異なるため、多くの教育者はHDLHの登場に相当困惑していたという事実である。

キャラハンインタビューのなかで、HDLHが出された当時、ELECTとの大きな違いに戸惑い、肯定的に受け止められない教育者も少なくなかったと述べている<sup>12</sup>。実際、オンタリオ教育省から出された『HDLH入門：教育者用（An Introduction to How Does Learning Happen? : Ontario's Pedagogy for the Early Years: For Educators）』という別冊には、戸惑う教育者たちに向けて、「HDLHは自分にとってどういう意味があるのか?」、「ELECTはどうなるのか?」、「まず何から始めればいいのか?」といったセクションが設けられている。そこには、「HDLHは今まで以上に何かせよと要求するものではなく、すでにあなたが実践していることを違う視点で見つめなおすためのものです。（中略）自分がどのようなことを行っていて、なぜそうしているのかということに自覚的になるためのものなのです」（Ontario Ministry of Education 2014b, p.6）というメッセージが記載されている。教育者に向けたこうしたメッセージが記されているということは、裏を返せば、いかにELECTが現場での教育実践を規定してき

たかという表れであろうし、教育者たちが日々の実践の意味を省察する機会が十分に保障されていたとはいえない現状にあったことを物語っている。

とりわけ、ELECTがチェックリストやベンチマークとして機能してきた事実を踏まえると、教育者たちがELECTに規定されたそれまでの実践を新たな視点から問いなおすことは容易ではなかっただろう。なぜなら、多様性と複雑性に満ちた子どもの学びと育ちに携わる教育者たちにとって、チェックリストやベンチマークは利便性が高く、教育成果の確実性を実感させてくれる道具だからである。キャラハンも、ELECTが広く浸透した理由の一つとして、それが教師たちにとって「安心と自信を与えた」ことをあげている。教師は、ELECTに記載されている多種多様なスキルの一覧を把握しておくことで、一連のスキルについて理解した気になるのだという。それに対して、HDLHは自由度が高く、それゆえ教師たちが「わかった」という感覚をもちにくい<sup>13</sup>。

先に触れたように、HDLHのイントロダクションでも、この政策文書は教育者たちに回答を与えるものではなく、さまざまな疑問や質問を喚起するものだということが示されていた。つまり、HDLHは、ELECTのように確実性を志向するものではなく、むしろ、教育者の不確実性とどう向き合い、省察し、実践を生み出していけるかが重視されているのだといえる。

### C HDLHが提起する抵抗の物語

ELECTからHDLHへの転換において、さらに留意しなければならないことは、両者は決して同じ方向を目指すのではなく、HDLHにとって、ELECTはやはり抵抗の対象だったということである。したがって、図1からは見えてこない部分、つまり、HDLHはELECTの提起する発達物語にどう対抗し、いかなるかたちで新しい物語を構築していったのかを明らかにしなければならない。

#### 1 レッジョ・エミリア・アプローチの導入

HDLHでは、まず、レッジョ・エミリアの教育哲学ともいえる「有能で可能性に富んだ存在」という子ども観に根差し、生きるための土台といった意味合いが込められているであろう4つの「基盤 (foundation)」が提起されていることはすでに確認した。HDLHでは、さらにこの4つの基盤をカリキュラムやプログラムに反映させるために、つぎの6つ「教育的アプローチ (pedagogical approach)」を提示している。すなわち、「応答の関係 (responsive relationships)」、 「探索、遊び、探求を通じた学び (learning through exploration, play, and inquiry)」、 「協同学習者としての教育者 (educators as co-learners)」、 「第三の教師としての環境 (environment as third teacher)」、 「教育ドキュメンテーション (pedagogical documentation)」、 「省察的实践と協同的探求 (reflective practice and collaborative inquiry)」という6つのアプローチである。

注目すべきは、これら6つの「教育的アプローチ」のなかに、「第三の教師としての環境」や「教育ドキュメンテーション」といったレッジョ・エミリア・アプローチに特有のものが含まれているということである。HDLHの巻末の文献リストにはレッジョ・エミリア関係の論考が多く含まれているのだが、そのほとんどがこの「教育的アプローチ」を説明するセクションに登場している。このことは、HDLHが、レッジョ・エミリアの教育の根底にある「子ども観」を掲げるだけでなく、それを具体化するための方法にも、多分にレッジョ・エミリア・アプローチが取り入れられているということを示している。つまり、HDLHでは、教育実践の根底にあるヴィジョン、言い換えるなら教育哲学とでも呼ぶべきものと、具体的な教育方法とを、レッジョ・エミリアの教育という一本の柱を据えることにより一貫性をもたせようとしていることがわかる。

さらに、ここで強調しておきたいのは、レッジョ・エミリア・アプローチの導入といっても、HDLHは、それをハウツーやマニュアルとして提示するのではな

く、教育者の探究と省察を促す仕掛けによって実現させようとしていることである。その仕掛けが最も象徴的に表れているのが、「教育ドキュメンテーション (pedagogical documentation)」だろう。実際、HDLHにおいても、6つの教育的アプローチのうち、この「教育ドキュメンテーション」に関する記述が最も多くみられる。

まず、HDLHでは、「教育ドキュメンテーション」についてつぎのような説明をしている。「教育ドキュメンテーションとは、子どもたちがどのように思考し学んでいるかを学ぶための手段」であり、「子どもたちの声を聴く方法」であり、「子どもたちが何かを経験している最中に見せる姿について学び、そうして学んだことを他者にも可視化し、その意味を読み解くための助けとなる方法」である。そして、「教育ドキュメンテーションは、単なる子どもの行動についてのレポートの域を超え、子どもの行為や経験に含まれている意味を発見していく手助けとなるものである」とも述べられている (Ontario Ministry of Education 2014a, p.21)。このHDLHの定義する「教育ドキュメンテーション」には、子どもの学びについて学ぶ教育者の、探究と省察が多分に求められていることがわかるだろう。

実は、ELECTにも「ドキュメンテーション」に関する記述が複数個所に登場する。ただし、ELECTでは、文書全体を通して「教育的 (pedagogical)」という形容詞がつかない「ドキュメンテーション」という用語が一貫して使用されている。ELECTの巻末の用語集では、「ドキュメンテーション」とは、「ラーニング・ストーリー、観察、言語サンプル、子どもの描いた絵、子どもが文字らしきものを書き記したものなどを集め、子どもの発達や学習のエビデンスとして、保護者等に見せたり共有したりするためのもの」 (Ontario Ministry of Education 2007, p.86) と定義されている。この定義から読み取れることは、ELECTにおける「ドキュメンテーション」とは、「教育ドキュメンテーション」が乗り越えようとしている「単なる子どもの行動についてのレポート」の域をでておらず、「発達や学習のエビデンス」としての役割を期待されているものだという事である。実際、ELECTにおいて、「ドキュメンテーション」という言葉が最も多く登場するのは、「アセスメント、評価、モニタリング」について解説がなされているセクションである。このELECTの想定する「ドキュメンテーション」には、HDLHの「教育ドキュメンテーション」で示されていたような、教育者が探究や省察の主体となり、

子どもの行為や経験に含まれている意味を読み解き、子どもの声に耳を傾け、子どもの学ぶ姿から学ぶといった考え方はほとんど感じられない。そう考えると、ELECTの想定する「ドキュメンテーション」から「教育的」という形容詞が抜けていることは、単なる表記の違いにとどまる話ではなく、レッジ・エミリアの教育の根底にある哲学が抜け落ちた単なる道具としての「ドキュメンテーション」になっていることを示しているといえよう。哲学が抜け落ちた方法は、容易にハウツー化、マニュアル化しやすい。そのため、HDLHでは、哲学と方法を一貫させたかたちでレッジ・エミリア・アプローチの導入することによって、ハウツー化やマニュアル化に対抗しようとしているのだと考えられる。

## 2 HDLH記載のチャートと「省察のための問い」

HDLHには、先ほど紹介した4つの基盤についてまとめた表1のあとに、もう少し詳しい項目が加えられたチャートが存在する。ただし、詳しいチャートといっても、一つの基盤につき2ページ分の表が付されているだけで、すべて合わせても6ページ分（HDLH本編の一割程度）に過ぎず、これは、すでに紹介したELECTのチャート、すなわち、年齢別・領域別に子どもの習得すべきスキルと実践者の具体的な声かけ・活動例等をまとめたチャートが45ページ（ELECT本編の約五割に相当）にもわたって示されていたこととはきわめて対照的である。HDLHでは、チャートがチェックリストやベンチマークとして使用されにくいように、必要最小限の項目に絞って内容を簡略化したのだと考えられる。また、それだけでなく、HDLHは、ELECTのチャートとは異なり、年齢別やスキルの領域別の構成とはらず、ただ各基盤につき一つの表が作成されているにとどまっている。さらに、その内容も、できるだけ具体的に限定的な記述は避け、教育者の探究と省察を促すものとなっている。例えば、「所属」という基盤に関するチャートには、子どもの所属感を育む可能性のある状況例や、そのためのプログラムや教育者のありかたが記載されているのだが、どの内容も、教育者自ら考え判断し実践しなければならないものとなっている。一例をみてみると、「子どもは最も心地よいと感じる方法で思いっきり何かに参加できているとき」に所属感が育まれる可能性があるという記述や、「教育者が、各子どもの心身の状態に合わせ、温かく細やかな方法で応答する」ことにより子どもの所属感が生まれやすいといった内容が書かれている。これ以上の具体的な記載はないため、教育者は、「子

どもにとって最も心地よいと感じる方法」とはどのようなものか、また教育者が「温かく細やかな方法で応答する」とは具体的にどうすればよいのか、自分の目の前の子どもたちのことを考慮しながら、自ら探究し省察しなければならないようになっていく。

こうしたHDLHのチャートは、ELECTの明確で限定的なチャートの内容と比較してみると、その違いが一層鮮明になる。先ほど、ELECTのチャートの2歳半～6歳の枠組みでは、さまざまな領域別に、合計55の基本的スキルと287もの指標が掲げられていることを紹介したが、ここから一つ例をあげてみよう。例えば、「社会性」の領域では、2歳半～6歳の子どもが獲得すべきスキルの一つとして、友だちとの揉めごとを解決できる力があげられている。そして、このスキル獲得を促す教師の働きかけとして、まず「子どもの気持ちに配慮しながら揉めている子どもたちに何が起きたのかを尋ね、彼らが問題解決に向けて自分で考えていけるように支援してください」という記述のあとで、かなり詳細な教師の声かけの例が記載されている。「何が起きたの？（一呼吸おく）」「それについてあなたは どう思ったの？（一呼吸おく）」「この問題を解決するためにあなたができることはなに？（一呼吸おく）」（Ontario Ministry of Education 2007, p.43）といったきわめて具体的で詳細な、そしてそれゆえ、教師や保育者が、自分の頭で考える必要のない発問例が続いているのである。キャラハンは、インタビューのなかで、教育者の実践を規定するこうしたELECTのチャートの記述は、「教育者たちの知性への敬意を欠いた、侮辱的なものでさえある」と強い口調で批判している<sup>14</sup>。

最後に、もう一つHDLHの特徴として注目したいのは、4つの基盤のチャートそれぞれの最後に、「省察のための問い（questions for reflection）」というページが設けられていることである。これは、教育者が自らの実践やプログラムについて、さまざまな角度から批判的に探究し省察できる機会を提供する目的で設定されたものである。そこに掲げられているさまざまな問いをみると、HDLHの政策文書としてのユニークさが、より一層、際立ってくる。

例えば、「所属」という基盤に付されている「省察のための問い」には、つぎのようなものがある。まず第一に、「自分たちのプログラムの哲学、ミッション、ポリシー、日々の実践について、よく考えてみてください。そのプログラムが重視している価値は、あなたと子どもの関係、あるいはその家族との関係に、どのようなかたちで反映されたり影響を与えています

か?」という問いが掲げられている (Ontario Ministry of Education 2014a, p.28)。このような問いは、教育者が自身の従事しているプログラムを無条件で肯定したり自明のものとするのではなく、その哲学やミッションやポリシーをも根本から問いなおす批判的な省察を促すものである。また、つぎのような質問もみられる。「もし、あなたが、子どもや保護者との関係をさらに深めるために、プログラムのなかで何か一つ変化を起こすとしたら、それはどのようなことですか?さらに、もし明日もまた別の変化を起こさなければならぬとしたら、どのような変化を起こしますか?」 (Ontario Ministry of Education 2014a, p.28) という問いである。これは、教育者が自身のプログラムを単に批判的に省察するだけでなく、もし、そこに何らかの障壁や障害があるのであれば、今日からでも自分の手で起こせる変化は何かを考えさせる、つまり、改革の視点を養う問いとなっている。

さらに注目すべきは、教育者が自らのプログラムを省察するにとどまらず、教育行政にまで視野を広げ、教育政策のありかたにまで関わるような「省察のための問い」を掲げていることである。それは、「表現」という基盤に付されている「省察のための問い」のセクションに記載されているもので、「教育者一人ひとりの声が大切にされ受け止められていると感じられるようになるために、行政側はどのような政策や手続きを導入することができるでしょうか?」 (Ontario Ministry of Education 2014a, p.45) という問いである。このような問いは、ともすると行政への不満や批判を誘発しかねない。それにもかかわらず、こうした問いが、州の正式な政策文書に掲げられているということは極めて異例であろうし、大きな注目に値するものである。このような異例とも思われる問いを行政みずから掲げたところに、オンタリオ州が、教育者たちの自律性と専門性を尊重し、このHDLHという抵抗の物語を打ち出すにいたった切実な思いを感じ取ることができるだろう。

## 6 おわりに

本研究では、全日制幼稚園の制度化と実施の過程に即して、オンタリオ州におけるレッジョ・インスピレーションの展開過程を検討した。

ELECTの特徴とその機能の仕方は、政策文書の持つ困難を提起している。ELECTは大きく二つの側面を持つ文書である。一つは、科学的な乳幼児研究や脳

研究に基づいて、子どもの発達を「発達の連続体」すなわち普遍的で順序的なものとして捉える側面である。もう一つは、良いと考えられている幼児教育から多様に学ぼうとした側面である。その結果ELECTは、スキルをリスト化して乳幼児教育を技術的に捉える方向性と、そのような機能の仕方を否定する、すなわちスキルのリストが評価やスクリーニングに使用されることを否定し、子どもの興味に基づく遊びを基盤とする学習を打ち立てようとする側面の両方を持っていた。しかしそれが全日制幼稚園のデザインに組み込まれた時に、カリキュラム・ガイドラインや評価指標の形成を通して教育実践を技術的に狭く規定するような方向性が強まっている。

レッジョ・インスパイアの教師用リソース、なかでもHDLHは、そのようなELECTの発達の物語に抵抗するために作成された。具体的には、「有能な子ども」という子ども観と教育ドキュメンテーションの導入によって、「発達の連続体」とは異なる考え方をもたらした。とりわけ重要なことに、HDLHは、教師や実践に介入する行政の力をどのように使うのかという問いを投げかけている。ELECTが文書の製作者さへ意図していなかったようなかたちで教師と実践をコントロールしたのに対して、HDLHは文書の中に問い直しを仕掛け、教師の知性を信頼し、そのオートノミーを保障していくための行政の力の働かせ方を模索している。

## <付記>

本研究の調査は3人で行い、1, 3, 4, 6章を浅井、2章を黒田、5章を北田が執筆した。

本研究にあたって、カリン・キャラハン氏、キャスリーン・ハント氏、キャロル・アン・ウィーン氏の協力を得た。感謝いたします。

本研究は、科学研究費(18KK0059, 17K04529, 16K04569)による成果成果の一部である。

## 注

- 1 ジム・グリーブの経歴は、The Canadian Association for Young Childrenのホームページを参照。(https://www.cayc.ca/content/jimgrieve) 2020年6月29日確認。
- 2 『乳幼児期の研究』が1999年に刊行されて以後、2007年に『乳幼児期の研究2：科学を行動に移す (Early years study 2: Putting science into action)』が、2011年に『乳幼児期の研究3：決定し行動する (Early years study 3: Making decisions taking action)』が刊行されている。



- 3 たとえば、「価値と規範にもとづく子どもの学習のための方向付け」「全体目標のなかでの最大自由の可能性」「子どもには共同的思考と論理分析的の組み合わせから最も利益を得る」「すべての教育レベルで共有の学習目標を、しかし、複雑さのレベルは多様」「幼児教育と（小）学校を通じた視点の連続性」「子どもの学習は意味の創造に焦点化されるべき」「カリキュラムは未来を見据えなければならない」「保育者の質が重要課題」「幼児教育のカリキュラムは、遊びと学びと、その関係性を扱うべき」「カリキュラムは評価されるべきであり、評価プロセスを組み込むこと」「幼児教育の質とその測定」「民主主義とジェンダーの問題」「ケアと教育の両方がカリキュラムに反映されるべきであること」が課題として挙げられている（OECD 2004）。
- 4 2001年度以降、EDIはカナダの多くの州で実施され、海外でも30カ国（地域）以上でEDIが実施されている（Offord center for child studies 2018a）。
- 5 2017-18年度のEDIの質問項目では、幼児教育者はそれぞれの生徒に対して、「身体の健康」（13項目）、「言語と認知的スキル」（40項目）、「社会的・情緒的発達」（58項目）、「特別な心配事」（5項目）、「追加的な質問」（8項目）について、合計124項目を尋ねている（Offord center for child studies 2018b）。
- 6 NDDSは、生後1カ月から72カ月の子どもを対象として、視覚、聴覚、会話、言語、コミュニケーション、粗大運動機能、微細運動機能、自動機能、認知機能、社会機能、情緒機能を評価するための簡易スクリーニングツールである。
- 7 MINISTRY OF EDUCATION EARLY YEARS RESOURCES 2015-2016（<http://www.edu.gov.on.ca/childcare/EL2013ResourceList.pdf>）2020年9月29日確認。
- 8 キャスリーン・ハントのインタビューより。
- 9 Ontario Reggio Association（<https://ontarioreggioassociation.ca/about/about-ora/>）2020年6月28日確認。
- 10 カリン・キャラハンのインタビューより。
- 11 カリン・キャラハンのインタビューより。
- 12 カリン・キャラハンのインタビューより。
- 13 カリン・キャラハンのインタビューより。
- 14 カリン・キャラハンのインタビューより。

### <参考文献>

浅井幸子, 2018, スウェーデンのレッジョ・インスピレーション, 発達, 156, 62-67.

犬塚典子, 2017, カナダの小学校における幼児教育とケア教員と保育者との連携一, 京都聖母女学院短期大学研究紀要, 46, 1-13.

相良亜季, 2008, 1990年代中葉以降のカナダにおける幼児教育・保育施策の特質—連邦・州政府間関係に着目して—, 教育学論集, 4, 27-52.

佐藤智美, 2016, 貧困削減対策としての就学前教育—カナダ・オンタリオ州の『連鎖を断つ (Breaking the Cycle)』における幼児教育一, 保育子ども年報, 71-88.

松井剛太, 2018, カナダのオンタリオ州とブリティッシュコロンビア州における全日制幼稚園の政策過程, 保育学研究, 56(2), 18-29.

Callaghan, K. and Avery, J., 2015, Inspired and Inspiring Change in Early Childhood Education in Ontario, *Innovations in Early Education*,

*Innovations in Early Education*, March 2015, 10-21.

Dahlberg, G., Moss, P. and Pence, A., 2013, *Beyond Quality in Early Childhood Education and Care (third edition)*, Routledge: London.

Dickinson, P., 2005, "International curriculum framework literature survey prepared for the best start panel on early learning" in ELECT Appendix A, pp. 99-141.

Edwards, C., Gandini, L. and Forman, G., 1993, Introduction, in Edwards, C., Gandini, L. and Forman, G. eds., *The Hundred Languages of Children: The Reggio Emilia Approach to Early Childhood Education*, Ablex Pub., pp.3-18.

Grieve, J., 2012, Transforming Early Learning Vision into Action in Ontario, Canada, *International Journal of Child Care and Education Policy*, 6(2), 44-54.

Janus, M., Brinkman S., Duke, E., Hertzman, C., Santos, R., Sayers, M., Schroeder, J and Walsh, C., 2007, The Early Development Instrument: A Population-based Measure for Communities A Handbook on Development, Properties, and Use, Hamilton, ON: Offord Centre for Child Studies.

Janus, M. and Offord, D., 2007, Development and Psychometric Properties of the Early Development Instrument (EDI): A Measure of Children's School Readiness, *Canadian journal of behavioral science*, Vol. 39, No. 1, pp. 1-22.

Janus, M., Duku, E. and Schell, A., 2012, The Full Day Kindergarten Early Learning Program Final Report, Submitted to the Ontario Ministry of Education, October 2012.

Moss, P., 2014, *Transformative Change and Real Utopias in Early Childhood Education: A Story of Democracy, Experimentation and Potentiality*, Routledge.

McCain, M. N., Mustard, J. F., & Shanker, S., 2007, Early years study 2: Putting science into action. Toronto, ON.

McCain, M. N., Mustard, J. F., & McCuaig, K., 2011, Early years study 3: Making decisions taking action. Toronto, ON.

Mustard, J. F., 2006, Experience-based brain development: Scientific underpinnings of the importance of early child development in a global world, *Paediatr Child Health*, Vol. 11, No. 9, pp. 571-572.

OECD, 2004, *Starting strong: Curricula and pedagogies in early childhood education and care: Five curriculum outlines - Curricula and pedagogies in early childhood education and care*, OECD directorate for education, Paris.

Offord center for child studies, 2018a, EDI Fact sheet <https://ediffordcentre.s3.amazonaws.com/uploads/2019/01/EDI-fact-sheet-2018.pdf> (2020.9.20.確認)。

Offord center for child studies, 2018b, EDI questionnaire (<https://ediffordcentre.s3.amazonaws.com/uploads/2019/01/EDI-ON-ENG-2018.pdf>) (2020.9.20.確認)。

Ontario Ministry of Education, 2007, *Early learning for every child today: A framework for Ontario early childhood settings* (ELECT). Best Start Expert Panel on Early Learning. Toronto: Author.

Ontario Ministry of Education, 2010, The Full-Day Early Learning - Kindergarten Program (Draft Version) 2010-2011.

Ontario Ministry of Education, 2013a, A Meta-Perspective on the

- Evaluation of Full-Day Kindergarten during the First Two Years of Implementation, October 2013.
- Ontario Ministry of Education, 2013b, Think, Feel, Act: Lessons from Research about Young Children.
- Ontario Ministry of Education, 2013c, Ontario Early Years Policy Framework.
- Ontario Ministry of Education, 2014a, How Does Learning Happen? Ontario's Pedagogy for the Early Years for Educators.
- Ontario Ministry of Education, 2014b, An Introduction to How Does Learning Happen? Ontario's Pedagogy for the Early Years for Educators.
- Ontario Ministry of Education Student Achievement Division, 2012a, The Third Teacher: Designing the Learning Environment for Mathematics and Literacy, K to 8, July 2012.
- Ontario Ministry of Education Student Achievement Division, 2012b, Pedagogical Documentation: Leading Learning in the Early Years and Beyond, October 2012.
- Ontario Ministry of Education Student Achievement Division, 2013, Student Voice: Transforming Relationships, September 2013.
- Ontario Ministry of Education Student Achievement Division, 2015, Pedagogical Documentation Revisited: Looking at Assessment and Learning in New Ways, January 2015.
- Pascal, C. E., 2009, With Our Best Future in Mind: Implementing Early Learning in Ontario (Report to the Premier by the Special Advisor on Early Learning).
- Vanderlee, ML., Youmans, S., Peters, R. and Eastabrook, J., 2012, Final Report: Evaluation of the Implementation of the Ontario Full-Day Early Learning- Kindergarten Program, Submitted to the Ontario Ministry of Education, Fall 2012.